

京都の大地形と景観 —東山を総覧して—

川崎 雅史

正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 教授
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

古い社寺や庭園が広がる京都の東山の山辺や鴨川の水辺の景観は、古来からの観光名所の魅力の源泉であった。その特有の景観は、京都盆地の大地形から生じる特有な眺望に基づいている。古神道の時代からの神聖な山容や杜への大きな風景へのまなざしと、山からつながる大地の流れの上に庭園や建築、みちの景観が成立する。そのつながりが認識できる時に自然への敬愛と場所のアイディティティが強調され、景観への向きあい方の覚悟や認識もできる。本稿では大地形とつながる景観に着目し、その先にある自然へのまなざし、近年の観光の動向も交えて、京都東山の景観を総覧する。

キーワード： 京都, 大地形, 東山

1. はじめに

本稿は、筆者がこれまで参画した京都東山の景観に関する研究^{1)~8)}をベースにして、大地形とそこから広がる大地の流れという視点から改めて京都を代表する東山の景観について総覧し、基本的な構造なるもの評論するものである。古社寺と庭園が広がる京都の東山の山辺や鴨川の水辺の景観は、古来からの観光名所の魅力の源泉であった。その特有の景観は、京都盆地の大地形から生じる特有な眺望に基づいている(図1)。

古神道の時代からの神聖な山容や杜への大きな風景へのまなざしと、自然からつながる大地の流れの上に融合する庭園や建築、みちの景観が成立する。そのつながりが認識できる体験ができる時に景観の強い意味が生じる。それによって、壮大な自然地形とつながれた場所のアイディティティが強調され、自然への向きあい方の姿勢もできる。大地形の観点から、風景の持続や近年の観光の動向も交えて東山の景観を総覧したい。

2. 景観を創る視線

京都の景観の構造を考える上で基本となるのは、盆地の地形であり、山に近い扇状地に都市があることである。山容と都市の間に、基本的な2つの視線が生じ、庭園文化や生活文化の背景となる景観を創る(図1)。

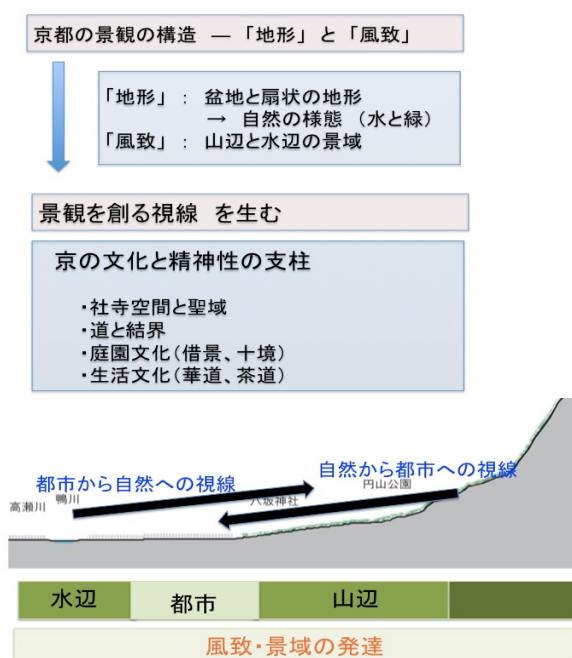


図1 京都の景観を創る視線

加えて都市の中心には鴨川が流れ、その川辺と山辺に、風致の領域が広がっている(風致地区は昭和5年の約3400haから平成28年には約17,938haに拡大)。近代都市計画制度の風致地区ではあるが、明治33年(1900)初代

市長の内貫甚三郎が東山界限を「東方ハ風致保存ノ必要アリ・・・」と述べ、「自然景観と文化景観との渾然たる特異の統一から成っている」と言及して以来、近世以前の古来京都から続く山辺と川辺の重要性に焦点が当てられ、現代における京都の景観政策の基軸にもなっている。

3. 東山の大地形と景観

既往研究^{1)~6)}において、地形と見え方、敷地構成などを庭園や寺院などを詳細に分析を試みたが、知恩院、円山・八坂、清水、清水成就院を一連の広域の大地形とみて景観の構造を考える。人々はまちから山頂まで10度以内の仰角により、自然に山容のシルエットが視野に入る風景を通常見慣れている。改めて東山の山系を立体として総覧すると(図2)、尾根と谷が複雑に入りこんだ形状において、とくに、尾根が大きく半島のようにまちへ突き出た岬形の地形、また大きな谷間(囲繞)をもつ

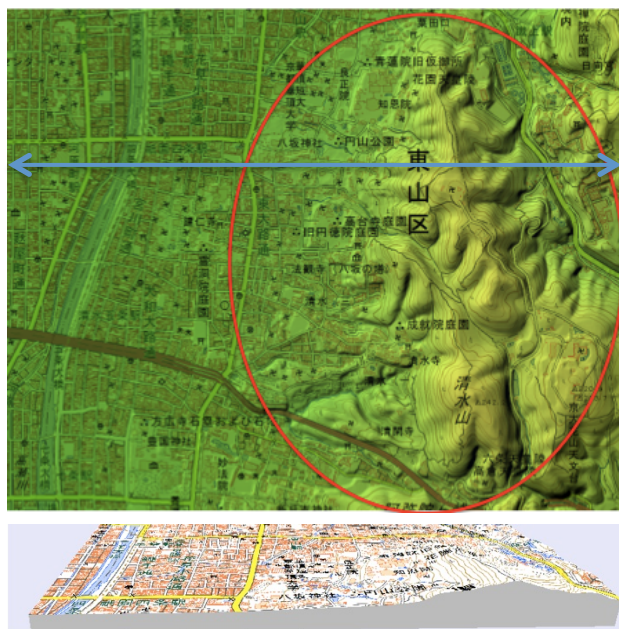


図2 東山の大地形(国土地理院Webデータより)



花楽名勝図絵(東山全図)(1864) 日文研Webデータより

図3 八坂祇園界隈の東山の山容とまちの景観(1864)

地形が東山の大きな特徴になろう。近世の絵図においても八坂祇園界隈においてもなだらかで連続したわかりやすい山のシルエットが雄大に表現されている(図3)。山と町の間には緩やかな緩傾斜の野、山辺が広がる。

清水寺界隈においては、清水参道、鳥辺野の二つの尾根地形(段丘面とも解釈できる⁸⁾)がまちに対して長く並立し、その地形特性から、雄大で固有な景観が成立している(図4)。

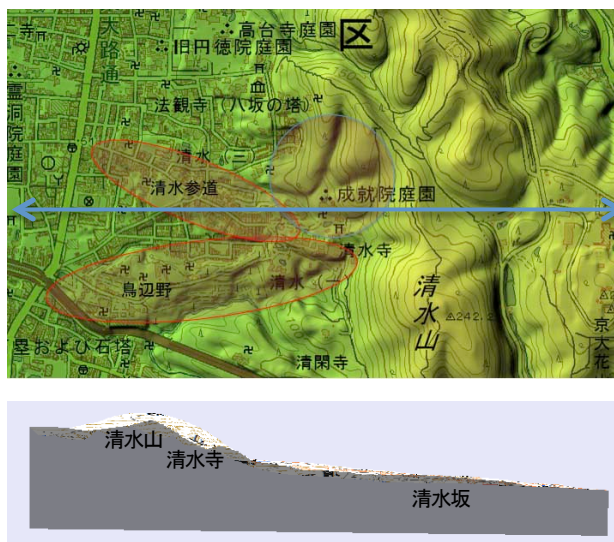


図4 清水の地形(国土地理院Webデータより)

清水の参道(清水坂)はなだらかな尾根地形の上にあることからその景観の魅力は、三年坂、二年坂などの坂道、坂道から眺望できる東山の山容と伝統的なまち並の借景(図5)、また参道に接続した路地から見える尾根、鳥辺野の大地形の眺望である(図6)。この大地形を背景とする雄大な景観は、清水の魅力の特筆すべき点であることは時に見失いがちである。観光インバウンドの効果もあり、三年坂、二年坂の伝統的な料亭、屋敷がカフェや雑貨などの商業利用で開放されている。その伝統的な屋敷の庭園敷地には柔らかな自然の微地形が存在し、眺望として見える山容の大地形とそこから流れる大地がつながっていることを認識することができる。それはまさに、大地のアイデンティティを感じることができる瞬間である。



図5 産寧坂の伝統的町並みと東山の借景



図6 清水参道の路地から見る鳥辺野の尾根筋



図9 清水寺の三重塔と音羽山の眺望

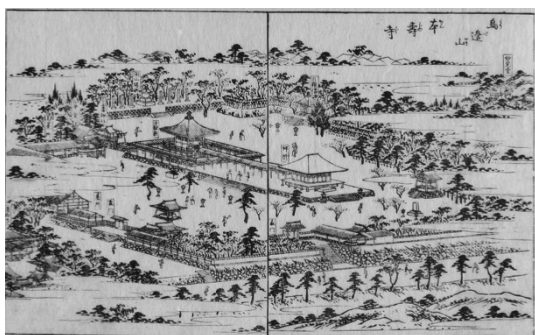


図7 鳥辺野 本壽寺 (拾遺都名所図会 (1787))
日文研HPより引用

清水参道の小路からは、隣の鳥辺野の尾根筋が町並みの屋根瓦の上に連なって見え、雄大な地形の流れを鑑賞することができる(図6)。この眺望の魅力を活かして、近年ではカフェや雑貨店を集めた小路を開設している。鳥辺野は古来から広大な葬送地であるが(図7)、その姿は木々で隠され、自然山容の谷筋として見える。

また、清水寺の境内や舞台から見える西方向への景観は、図6の町の屋根は一切見えないようになり、同じ尾根筋をみるが、その様相は変化する。音羽山、鳥辺野の尾根筋の緑が勢いよく都市へ向けてダイナミックに流れるように開け、その先には京都市街と遠く西山が重なって見える(図8)。尾根の勢いは留まることを知らない。



図8 清水の舞台付近の眺望(雄大な尾根筋と市街地)

東の方向には、崖地に列柱した塔と複数の建築は崖地上の線状配置と境界の植栽のデザインの操作により、雄大



図10 伽藍配置と図9の視線方向(境内案内板より)

な山容と三重塔のシンプルな景観構成に集約されている(図9、図10)。一方、南方の延命院付近から北方向の境内方向を見ると、門、伽藍建築の列と成就院近傍の山容が重なり、山から尾根、崖とその上の建築群の明瞭な流れを把握できる借景が形成されている。

山側の北奥に位置し、清水の本坊である成就院周辺の地形も、清水の大地形のつながりとしての連接的な存在を有している(図4)。庭園の景観については、既往研究⁷⁾において詳しく分析しているが、複数山系の部分的な可視の合成効果による一連の雄大な山容表現や、谷地形の俯瞰の景観が特性であり、ダイナミックな地形の個性⁷⁾に依存するものである。

4. 結び—自然へのまなざし

3章での考察のとおり、清水山、清水坂の尾根、鳥辺野の尾根、成就院の地形はそれぞれがまとまりをもつ地形が大きく連接した大地形である。そして、各地形が関係性をもつ景観を眺めることができる眺望点が成立している。そこから見える雄大な景観はシンプルな構成で力強く見え、大地のつながりを確認することができる。

清水のみならず、総じて、清水から祇園、知恩院へと続く東山一帯の大地形の構成は、山容、岬形地形、尾根筋のまとまりがありその接続を認識してはじめて、そこに雄大かつ緻密な固有の景観が存在している理由がわかる。大地形から庭園や道のディテールまでつながりのある大地を認識できたときに、強い場所のアイデンティティが浮かび上がってくる。

近年のインバウンドや地形の散策ブーム⁹⁾も単なる一過性ではなく、京都の景観と見方の魅力の本質が光りを発露しているからかもしれない。それは古来から京都の人々が自然とどう向き合ってきたか、自然をどのような姿として見てきたかに大きく関わっており、古神道から続く宗教観とも大きく関わるものと考えている。発表会ではこの観点も含め、より詳細に考察を進め、大地形から微地形までをつなぐ景観の構造を議論できれば幸いと思われる。

参考文献

- 1) 出村嘉史・川崎雅史：近代京都の円山公園における景観構成の分析，土木学会論文集，No. 744/IV-61，pp. 93-100，2003.
- 2) 出村嘉史・川崎雅史：近世の祇園社の景観とその周囲との接続に関する研究，土木計画学研究論文集，Vol. 21. no. 2，pp. 393-398，2004.
- 3) 出村嘉史・馬田宣雄・川崎雅史・樋口忠彦：清水・八坂・下河原・円山における隠れ場と眺望に関する研究，土木計画学研究講演集，Vol. 2.，pp. 53-56，2006.
- 4) 出村嘉史，大住由布子，川崎雅史，樋口忠彦：本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景域の構成，土木学会論文集D，Vol. 63 no. 2，pp. 158-168，2007.
- 5) 出村嘉史・大住由布子・川崎雅史・樋口忠彦：近世後期の祇園清水あたりにおける寺院座敷の構成，土木計画学研究講演集，Vol. 5.，pp. 113-118，2009.
- 6) 山口敬太，中島功，川崎雅史：京都の古庭園における地形的囲繞の構成と眺望景観の特性，土木学会論文集D，Vol. 65 no. 3，pp. 317-328，2009.
- 7) 川崎雅史，山口敬太：古庭園のダイナミズム，景観・デザイン研究講演集，第10回，CD-ROM，2014.
- 8) 山田圭二郎：間と景観，pp. 19-20，pp. 53-56，2008.
- 9) 梅林秀行：京都の凹凸を歩く，pp. 14-41，青幻舎，2016.